

- (45) <http://www.el.tufs.ac.jp/prmeis/src/read.php?ID=21655>, 二〇一一年二月五日確認。なおコプトの人権活動家が政党アル・ハヤーを結成したが、キリスト教政党ではないと明言している (<http://www.alhaya.com/en/node/510585>, 二〇一一年二月五日確認)。
- (46) <http://www.ikhwanweb.com/article.php?id=28697>, 二〇一一年一月三〇日確認。
- (47) <http://www.nytimes.com/2011/03/10/world/africa/10egypt.html>, 二〇一一年一月三〇日確認。
- (48) <http://english.ahram.org.eg/NewsContent/1/64/11623/Egypt/Politics-/Sectarian-violence-in-Egypt-clouds-postrevolution.aspx>, 二〇一一年一月三〇日確認。エジプト社会ではコプト・ムスリム間の恋愛や結婚、また改宗(とくにイスラームから他宗教)は事実上タブーとなっているが、その禁が破られた結果、これまで大規模な衝突にまで発展するのでは稀である。
- (49) <http://english.ahram.org.eg/NewsContent/1/64/23731/Egypt/Politics-/Perpetrators-of-Maspero-violence-to-face-military.aspx>, 二〇一一年一月二八日確認。
- (50) 二〇一一年二月二十四日付朝日新聞。
- (51) <http://www.fatherzakaria.net/>, 二〇一一年一月二八日確認。

随筆

東日本大震災から 宗教と文明のこれからを考える

なかの つよし
中野 毅

二〇一一年は日本史上また世界史上まれにみる大変動の一年だったと言っても過言ではないでしょう。三月十一日に発生した東日本大震災(M9.0)は未曾有の被害をもたらし、福島第一原子力発電所の暴走による放射能汚染は、日本国民そして世界の人々に大きな衝撃を与えました。二〇一〇年の暮れから始まった中東・アフリカの「アラブの春」の展開は、エジプトやリビア等の独裁政権を民衆の力によって打倒し、民主主義の身、そして欧米の新植民地主義的な周辺諸国との関係を再度問い直すことになりました。アメリカなど先進諸国でも金融危機が発生し、また極度の格差社会の出現に対して Occupy Wall Street 運動や九パーセント運動が若者主導で拡大し、金融機関や政府への抗議が続いています。世界は再び大変動期に突入し、二〇世紀型の社会や国際秩序の再構築を要請しているのです。

本誌の特集テーマは「文明の転換」ですので、この大変動を私なりに文明論的に考えてみたいと思います。古典的社会学者となつたマックス・ウェーバーは、西洋ではプロテスタント的宗教倫理が転機として機能した結果、その倫理と親和性をもつ「資本主義の精神」が近代資本主義を推進してきたと説きましたが、それはさらに民主主義を理想とし、政教分離制度を理念型としてもつ世俗国家を生みだしました。こうした西欧近代社会を貫く原理は、個人主義と形式的合理性と効率性です。それはまた自然を支配し、物質的豊かさを追い求める文明として発展したと言ふこともできるでしょう。超越的な唯一神という神観念のもとで世界を脱呪術化したことで、人間は自然界を経験的、合理的に探求する科学的手法を発展させて自然のメカニズムを解明し、その成果を生かして自然を思うがままに支配し、変貌させて、自分たちの利益のために利用してきのです。

その帰結として、人間は「神の火」⁽¹⁾をも手に入れることができました。原子核を人為的に分裂させてエネルギーを引き出す核技術は確かに画期的なものであり、生み出される巨大なエネルギーは原子爆弾・水素爆弾として登場しましたが、やがてその爆発を制御して発電する原子力発電システムを発明しました。その恩恵を受けて、私たちの生活のある部分は効率よくなり、便利になり、豊かになりました。宇宙から見た地球の映像が流れるたびに、世界の先進諸国が夜でも明々と照らし出されるのを見て感動したものです。とりわけ日本列島は、不況だ不況だと騒いでいるにもかかわらず、明るく輝いていました。

この日本は、明治維新以降、西欧近代を模倣し、その諸原理を導入することで富国強兵をは

かり、文明化＝西洋化をひたすら追求してきました。そしてアジア近隣諸国を植民地化し、愚かな戦争をするなど「西洋を鏡」として同じ轍を踏んできました。⁽²⁾それらがもたらす負の部分に目を向けることなく、「坂の上の雲」を指して走り続けてきたのです。先の大戦では原子爆弾による甚大な被害をうけたにもかかわらず、平和利用と称して原子力発電所を五四基も建設してきました。近年では翳りが出てきたとはいえ、日本は経済大国になり、オール電化の住宅が流行するなど、生活は豊かで便利になったのです。

しかし、三月一日に起きた東日本大震災は、われわれの安逸な夢を粉々に打ち砕きました。この地震はマグニチュード9という有史以来の大地震であり、それによって引き起こされた大津波による被災、さらに福島第一原子力発電所の全電源喪失という未曾有の事故による広範囲な放射能汚染という三重苦を生み出し、死者行方不明者は二万人、震災避難者三十三万人、原発事故による避難者は一五万人を越えました。突然の死に見舞われた多くの人々、親や親族、友人を一瞬にして目の前で失った遺児遺族の方々、そして種々の放射線が振りまかれて家や土地を失い、長期にわたり被爆と発病の恐怖に生きていかなければならない多数の人々を生み出しました。「神の火」は、制御不能になると甚大な被害をもたらす「悪魔の火」でもあったのです。

この地震や原発事故を「想定外」の、または「想定を超える」ものだと言主張する関係者たちがいます。しかし、これらは決して想定外の自然災害とは言えません。一部の地震学者や地質学者、歴史学者は、貞観十一年五月二十六日（グレゴリウス歴八六九年七月一三日）に陸奥国東方